

委員会報告

デザイン部会

「マンションへの取組：南條洋雄氏」の講演で感じとれる建築家の意味

デザイン部会長 連 健夫

デザイン部会3月8日の例会で南條設計室代表の南條氏を招き、マンションへの取り組みについて話してもらった。氏のユニークなところは皆が認めるところであるが、やはり話も個性豊かであり、ざっくばらんに本音で語られた。その要点は、(→は、筆者の読み取り)

1. 一般市民にとって最も「密接」な建築は「マンション」である→つまりマンションは身近で大切な建築
2. 「マンション」のほとんどは「建築家」の設計ではない→なぜか建築家にとって魅力がない建物
3. JIAで「マンション」は実績になりにくい→もっと注目され、実績となるべきである
4. 「マンション」と「集合住宅」は違うのか→商品価値としてのマンションのイメージが強い
5. 「集合住宅」設計には、かなりの特殊ノウハウが必要である→専門家が存在する
6. 「集合住宅」設計には、市民レベルの生活感に根ざした一般常識が必要である→地に足がついた理論
7. 「集合住宅」設計にも革新性と大衆性の両方が求められ、共に重要なテーマである→バランス感覚
8. これからの「集合住宅」は「まちづくり」の主役である→ソフトとハード両方の意味で街をつくる
9. 市民社会が最も期待する「建築家」の役割は良質な「集合住宅」を世に送り出すことである→建築家は良質の意味を再考すべきである。

これらを、氏自身の取組の変遷(アイアールエー時代→ブラジル時代→長谷工とのコンビ→東京の外国人マンション→山田建設との付き合い→川間リゾートへの参加→住都公園への参加→繁華への参加→ウェルシティー横須賀→デザイン監修という参加→再開発事業と住宅設計)の中で、エピソードを交えながら分りやすく語られた。特に建築家がデザイナーとして関与するのか、コーディネーターとして関与するのか、建設会社の広告塔として関与するのかなど、自身の体験を踏まえながらその特質が浮彫りになった。このように氏の話の要点がパリエーションに富んでおり、質問、コメントも様々な角度

からなされ、活発なディスカッションとなった。

この中で気になるのは、やはり、集合住宅という建築評価軸である。JIAで「マンション」は実績にならないという彼の視点は、日本の建築界のやや偏った視点に原因があるのではないかと。言うのは、欧米において、J. スターリングのハムコモン、P. スミソンのロビンウッドガーデン、N. ヤノスキーのピカソアリーナなど集合住宅が建築家の話題作になっているものが、次々に思い浮かぶからである。これらは、主義と材料の使い方が評価されたもの、理念の実現が評価されたもの、デザインの独創性が評価されたものなど評価軸が多様である。この点、日本は、デザインとはいうものの、結果としてのデザイン、つまり空間構成や材料の使い方などハードな視点に偏っており、評価軸に多様性がないのではないかと。南條氏が指摘するように、今後建築家の役割が多様になることは間違いない、これに伴って時間軸を含めた建築評価が大切になってくるのではないかと考える。すなわち、プロセスと結果との関係、結果と使われ方の関係などである。これはつまり、ソフトを含めた建築の意味の評価と言えよう。建築家の今後の役割の一つとして、従来の物理的与条件から空間を導き出すだけではなく、コンテクストからデザインする、つまり意味をデザインすることが大切になってくるのではないかと。この視点に立てば、建築の多様な価値観にも対応しうるし、その意味で、マンションなども、建築家のターゲットに十分になるうるのではないかと考えさせられた。

これ以外にも、マンションの開発手法、商品としての価値、必要なデザインなど様々なことを根本から考えさせる意味ある講演であった。今後のデザイン部会も密度の高いディスカッションを引き出すような場にしていきたいと改めて感じさせられた。<(有)連健夫建築研究室 主宰>